

# 青海省同仁県のボン教寺院

森 雅秀\*

- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1. はじめに       | 5. ポンギャ寺供養堂の尊像 |
| 2. 調査の概要      | 6. キュンポ寺の尊像    |
| 3. 寺院の概要      | 7. おわりに        |
| 4. ポンギャ寺本堂の尊像 |                |

## 1. はじめに

未解明な部分の多いボン教研究の中で、図像に関する研究は比較的蓄積がある。チベット仏教の図像集の中に、ボン教の神々の姿を描いたタンカや彫刻が含まれていることもあるし（たとえば Lauf 1979; 田中 1998）、ボン教一般についての記述の中に、ボン教の神々やパンテオンの説明を行っているものもある（たとえば Karmay 1975、カルメイ 1987）。ボン教の開祖トンパ・シェンラブ（シェンラブ・ミポ）の生涯を描いたタンカ・セットに関する詳細な研究（Kvaerne 1986）や、特定の神に関する個別の研究も発表されてきている（Kvaerne 1988, 1990, 1997）。また近年には Kvaerne による『チベットのボン教』（The Bon Religion of Tibet）という包括的な研究も現れた（1995）。

しかし、ボン教の神々の体系、すなわちパンテオンの全体の構造や、それを構成する神々相互の関係、あるいは彼らがどのような姿で表現されるかなどについては、ほとんど明らかになっていない。

ボン教の寺院をおとずれると、その内部におびただしい数の神々の姿を見ることができる。それらは本尊を中心とした彫像であったり、壁面を飾るタンカや壁画であったり、あるいは天井に描かれたマンダラであったりする。また神々の姿のみならず、ボン教の高僧や伝説上の人物たちも、これらの図像作品の題材となっている。

これらのアイコンから見て、ボン教徒たちが仏教徒に匹敵する壮大なパンテオンを有していることは明らかである。そして個々の神々や人物の姿を見てみると、その図像上の特徴に仏教の影響が色濃く現れていることも認められる。また神の名称にも仏教の尊格との共通性を指摘することができる。

吐蕃時代の古いボン教は特定の神格を有しながらも、それらをアイコンとしては表現していなかったといわれる（スタン 1933:279-295; 山口 1988:149-169）。現在のボン教徒たちが有している図像の体系の一部は、おそらく仏教のそれを参考に生み出されたものであろう。しかし、その中にはボン教独自の要素や、ボン教が古くから有しているシンボリズムの体系も含まれているはずである。

チベットの仏教美術は宗教美術として独自の形式を持っている。インド密教から受け継いだ

\* 高野山大学

マンダラ（キンコル）はその代表的なものであろう。あるいは、巨大な樹木を描き、その中心に釈迦や各宗派の開祖を置き、その周囲に数多くの尊格や人物を配した集会樹（ツォクシン）も、そのような例としてあげることができる。十六羅漢や三十五懺悔仏、八十四成就者などのグループを描いた作品も、それぞれ固有の形式を持つ。ボン教の美術の中にも、これらに共通する形式のものを見いだすことができる。描かれた主題のみならず、その形式においてもボン教の美術と仏教美術の比較研究が必要であろう。

ボン教の美術作品を内部に飾るボン教の寺院や僧院についての研究も立ち遅れている。宗教的建造物の内部空間におけるアイコンの配置は、その宗教の教理と密接に結びつき、特定の意味やシンボリズムを反映することが多い。寺院構造においてもボン教と仏教は近似性を有しているが、そのような意味についても、両者の間で共通性が見いだされるかは検討の必要がある。そのためにはボン教寺院の多くの事例の中から、プランの類型を抽出し、意味の解明を進めなければならない。

多の宗教美術と同様、ボン教の美術も単に鑑賞や装飾を目的とした芸術作品ではない。それらぐ礼拝や供養の対象である尊像であるのはもちろんであるが、ボン教独自の宗教実践や儀礼において、はじめてその意味を明らかにすることもある。儀礼や儀式などの宗教行為と、アイコンのような視覚イメージは、切り離して扱うことはほとんど不可能であるからである。ボン教の儀礼に関しても、これでほとんど何も明らかにされていない。膨大な儀軌類が現存し（たとえば Karmay 1977:155-163）、実際の寺院や僧院内でさまざまな儀式が行われている。その中には灌頂（ワンクル）や護摩（シンセー）、完成式（ラブネー）などのように、チベット仏教においてもよく知られた儀式が含まれる。しかし、その一方で仏教には見られない独自の儀式名も数多く伝えられる。集団的な儀式や儀礼ばかりではなく、個人的な実践である瞑想や観法などのような文脈でも、視覚イメージの機能を解明することも重要な課題であろう。

ボン教の美術や実践に関しては、すでにあげた研究の他にも、Kværneによる一連の研究(1982, 1985 etc.)や、Nebesky-Wojkowitz による先駆的な研究(1947, 1975)をあげることができる。この中でも Kværne (1985) は葬送儀礼と神像についてかなり詳細な報告を行っている。また Nebesky-Wojkowitz (1975) はボン教そのものの研究書ではないが、チベットの民俗誌として重要なもので、ボン教のパンテオンについての記述も豊富である。ただし、護法神を中心とした研究でありながら、そのイメージを伝える図版がほとんど含まれていないことが惜しまれる。このほかに Denwood による「十二儀軌」(cho ga bcu gnyis) についての短い論考(1983)や、Karmay のゾクチェン研究(1988)などもあげることができる。しかし、ボン教のパンテオオンの全体像と儀礼の体系を知るまでには至っていないことは、これまでに述べてきたとおりである。

このような研究状況をふまえ、ボン教の芸術的側面についてまずはじめに行うべきことは、可能な限り資料を集めて、その全体像を把握することであろう。そのためには(1)現存するボン教寺院を対象とする調査研究、(2)歴史的遺品についての調査研究、(3)ボン教の文献に含まれる情報の収集などが必要である。

このうち(1)の現存するボン教寺院の調査研究として、筆者は中国の青海省において現地調査を実施した。このとき収集した情報をもとに、現在(2)と(3)についても研究を進め

ている。本稿ではその中間報告として、実際に調査を行った寺院内部のボン教美術について、主題の同定、配置プラン、具体的な図像上の特徴などを報告する。まずはじめに、次節では調査の概要から簡単に述べよう。

## 2. 調査の概要

現地調査は 1988 年 8 月に約 3 週間にわたって、青海省同仁県において行った。この時期の現地は、主要作物である麦の収穫期に当たり、晴天の多い過ごしやすい気候である。気温は日中は摂氏 20 度前後で、湿度も低く快適である。

同仁県は青海省の東部に位置し、チベット文化圏の中でもほぼ東端に相当する。青海省の省都である西寧市の真南にあり、同仁県の県都である同仁市（チベット名はレブゴン）までは、直線で約 120 キロメートルの距離がある。ただし両市の間には標高 3000 メートル前後の山々が連なるため、車を利用しても移動には 3、4 時間を要する。同仁市の周辺でも 2500 メートル程度の標高がある。同仁市の近くには黄河の源流も流れ、これに沿って幹線道路が開けている。

ボン教の寺院はチベット自治区をはじめ、四川省と青海省に相当数存在していることが報告されているが、その中でも同仁県のボン教寺院は開放地区にあり、現地までのアクセスも比較的容易である。今回の調査ではとくに同仁県のボン教寺院の中で最も規模の大きいボンギャ寺（Bon rgya dgon pa）について重点的に調査を行った。あわせて同仁市周辺のいくつかのボン教寺院についても予備的な調査を実施した。ボンギャ寺は同仁市の中心から南におよそ 10 キロメートル離れた山中にあり、百人以上のボン教の僧侶を擁する大僧院である。僧院長は活仏（リンポチェ）で、他の僧侶や信徒から絶大な崇敬を受けている。この僧院長を中心に宗教活動も盛んで、従来のボン教の伝統をよく維持し、継承している。

今回は同寺院において①僧院の概要、②僧院内の図像作品、③僧院で行われる儀礼という 3 つの項目について調査を行った。とくに②の僧院内の図像作品の調査では、主要な作品の写真撮影と尊名の同定を進めるとともに、寺院全体のプランとの関係や全体的な意味の解明などにつとめた。また③の僧院内の儀礼については、調査期間中に行われた儀式について、写真およびビデオ撮影を行い、儀礼の内容や方法に関する聞き取り調査を行った。また儀式で使用した文献（儀軌）も入手し、現在、内容の分析を進めている。

本稿では①の僧院の概要についての主要なデータと、②の僧院内の図像作品の内容と配置について紹介する。③の儀礼に関する調査結果は、実際に収録した映像資料と儀軌文献の内容の分析をふまえ、別の機会に報告する予定である。

## 3. 寺院の概要

ボンギャ寺は正式にはメンリ・シェートブ・ミンドルリン（sMan ri bshad sgrub smin grol gling）という名称を持つ。ボン教は大きく古派（myin ma）と新派（gsar ma）の 2 派に分かれるが、当寺はこのうちの古派に属する。寺院名のはじめの「メンリ」というのは、14 世紀のボン教の高僧ニャムメ・シェーラブ・ゲルツェン mNyam med Shes rab rgyal mtshan (1356-1415)が開いた

「メンリ寺」に由来し、その系統に属することを示す。ニャムメは仏教にならって戒律を制定し、ボン教の僧団を組織化し、現在のボン教の基礎をきずいた人物である。ニャムメの尊像は寺院内でも数多く見られる。

寺院は山の斜面にたてられ、勤行や法要など行う本堂 ('du khang, 集会堂)、神々の像をまつる供養堂 (mchod khang)、さらに応接室 (mgron khang)・高位の僧の居室 (gzin khang)・厨房 (gsol thabs) がひと続きとなった建物など複数の建造物からなる。この中でもとくに規模の大きな本堂は二層からなり、二階部分はツェンカン (btsan khang, 土着神堂) と呼ばれている。一般の僧侶が居住しているのは、これらの中心的な建造物の周囲に点在する僧坊で、その数は数十にものぼる。

調査時において僧院にはおよそ 110 人の僧侶が所属していた。僧院長 (dgon bdag) グレク・フントゥブ・ギャンツォ dGe legs lhun grub rgy mtsho 僧正は先述のとおり活仏である。他の役僧としては、僧院内の教育面を担当する mkhan po、生活全般や経理を担当する khri ba、風紀と規律を司る zhal ngo、儀式において進行役を務める byung 'dren (あるいは dbu mdzad)、zhal ngo の補佐にあたる dge g'yog などがあげられた。僧院長の活仏は当寺 63 歳というかなりの高齢であったが、それ以外の役僧はすべて 30 歳代という若年層で占められていた。これはいわゆる文化大革命時代に、寺院の活動が停止されていたことにも起因するのであろう。このほか、調査時には四川省のボン教寺院から、高位のボン教徒が長期滞在していた。彼らの話によれば、四川省と青海省のボン教寺院の間では、人的交流が盛んに行われているらしい。

寺院の歴史は明らかではないが、現地で入手した『甘肅藏伝仏教寺院』(蒲 1990) という文献には、同名の寺院が簡単に紹介されており、仮りに同一の寺院であったとすれば、創建は明代の万暦年間 (1573-1647) となっている。ただし、現在の建造物はほとんどがこの 10 年間の間に増改築されたもので、それ以前の建物は残されていない。

ボンギャ寺の年間の主要な儀礼として、以下の4つがあげられた (日付はいずれもチベット暦)。

1. dbal gsas sgrub chen (9月15日～22日)
2. klong rgyas sgrub chen (1月3日～9日)
3. yi dam kun 1 dus kyi sgrub chen (4月)
4. mnyam med gos sku chen mo (5月)

とくにはじめにあげたウェルセーの儀式には、チャムと呼ばれる仮面舞踊も行われ、近在の信者が多数集まるという。また最後にあげたニャムメの法要の時には、ニャムメを描いた巨大な布製のタンカが広げられる。

毎月行われる儀式としては、次の3種がある。いずれもチベット暦である。

10日: tshe dbang bod yul ma

15日: klong rgyas

8日と25日: sman lha, kun rig, byams ma, kun dbyings, nam 1 joms, dgi spyod

三つ目の儀式はメンラ以下の6種の神のいずれかを対象とする法要である。6種の神からどれを選ぶのか、あるいはどのような順序で行うかについてはとくに定めがないという。これらの6神は「十二儀軌」と呼ばれる儀礼に結びついた12の神のグループに含まれている。

僧院の経済的基盤は、回りの村々からの布施が中心である。いわゆる檀家の存在する範囲はきわめて広く、隣県にもまたがり、その数は同仁県内で 2000 戸以上、沢庫県に 600~700、貴南県に 200~300、貴徳県におよそ 100 戸を数えるという。これらの檀信徒の葬儀や法要を司るほか、治病や除災のための宗教活動も行っている。このほかに、中国政府からの国家的援助もなされている。近年、僧院の増改築が可能となったのも、この援助によるところが大きい。

僧侶は周辺の檀信徒の家からの出家者が大半を占める。そのほとんどが農民の出身である。13、4 歳頃に出家するのが平均的で、それまでは通常の学校教育を受ける。出家後はボン教の教理や実践についての修行を重ねる。日々のスケジュールとしては、午前中に学習の時間がおかれ、経典の読み方とその内容について、教師や先輩僧から学ぶ。午後は勤行にあてられ、僧侶全員が本堂において、約 2 時間行う。途中で 1 時間程度、問答の時間がおかれる。内容はボン教の教理にかかわるものであるが、問答の雰囲気は仏教のそれと何らかわりはない。また問答をはさんで行う勤行は、前半が *sgyun 'don*、後半が *skyor 'sbyang* と呼ばれる。もちろん、特別の儀式や法要のある日は、この限りではない。

#### 4. ポンギャ寺本堂の尊像

ボンギャ寺の中心的な建造物である本堂には、彫像、絵画あわせて 40 点近くの尊像作品が置かれている。いずれも近年制作された作品と考えられる。これらの配置を概念的に示すと図 1、図 2 のようになる。名称はいずれも現地の僧侶からの聞き取り調査にもとづく。

本堂は二層からなるが、中心部分は吹き抜け構造をとり、二層部分はこの周囲をめぐる回廊となっている。本堂は南に面して入口があり、観音開きの扉が 3 枚ある。通常は中央の扉のみが用いられているようである。1 階部分には窓はないが、吹き抜けの上部の二層の回廊部分には壁を作らず、柱の間を半透明のシートのようなもので覆っているため、採光は比較的良好である。

##### 彫像作品

本堂にはいと正面に置かれた 5 体の等身大の彫像が強烈な印象を与える。高さ 1 メートル程度の壇の上に、横一列に並んでいる。おそらく塑像に金泥を塗ったものであろう。頭髮の部分は青く塗られ、宝冠や装身具には赤や緑の玉がはめ込まれている。

5 体のうち、中央に位置するのはナムケン・ゲルワ・シェンラブ *rNam mkhyan rgyal ba gshen rab* である。結跏趺坐で坐り、右手を上方に振り上げ、左手は左膝の上に置く。問答をするときの姿勢によく似ている。表情は目をつり上げ、口を半開きにし、やや忿怒の雰囲気を示している。豪華な宝冠をいただき、瓔珞や臂釧、腕釧などで身を飾る。表情を別にすれば、仏像でいうところの「菩薩形」にほぼ匹敵するスタイルである。この尊格については *Kværne* がナム・パル・ゲルワの名で紹介している (1995:66-69)。尊容はいずれの作品でもほぼ共通している。また *Kværne* によれば、この尊容はボン教の基本経典である『セルミク』*Zer mig* に記載があるという。なお、今回調査を行った同仁県にある他のボン教寺院 2 例でも、本尊はここと同じくナムケン・ゲルワ・シェンラブであった。

中尊の右隣には、シェーラブ・マワ・センゲー *Shes rab smra ba'i seng ge* が置かれている。ボン教の諸尊の中でもとくに人気の高い尊で、「マセン」という略称で親しまれている。右手は剣を振り上げ、左手は胸の前で施無畏印のような形で、植物の茎を持つ。この植物は体の左に直立して伸びており、その上には夾函が置かれている。この尊容は明らかに仏教の文殊を意識したものであろう。チベットの文殊像の典型的な尊容であり、インドのアラパチャナ文殊の流れを汲むものである。名称についても、それを構成する「智慧」(*shes rab*)、「語」(*smra ba*)、「獅子」(*seng ge*) は、いずれも文殊と密接に結びついた言葉である。

中尊の左隣で、マセンの対となる位置にはゲルユム・チャムマ・チェンモ *rGyal yum Byams ma chen mo* が置かれている。名称から知られるように女性の尊格であるが、身体的特徴や装身具は、上記の2尊とほとんど同じである。チャムマとのみ呼ばれることもあり、この名称は仏教の主要な菩薩のひとりである弥勒 *Byams pa* に共通するが、尊容には影響関係はうかがわれない。むしろ、仏教パントオンにおけるターラーに近い存在であろう。また、シェーラブ・チェンマという名称を持つことから、シェーラブ・マセンと密接な関係が予想される。マセンと対となっていることも、これに関連するのであろう。アトリビュートとして右手に薬壺、左手に鏡を持つが、この作品では、左手はマセンの左手と同じような植物を持ち、その上に鏡を置いている。Kværne が紹介する作品 (1995: pls. 10, 11) にも、直接鏡を持つものと、植物の上に鏡を置いた二つのパターンがある。なおチャムマは、後述するクンサンの右脇侍としても登場する。

5体の彫像の向かって左端は、先述のニャムメ・シェーラブ・ゲルツェンである。僧衣をつけて結跏趺坐で坐り、頭上にはボン教徒の固有の帽子である蓮華帽をかぶる。両手は胸の前に置かれ、そこから体の左右に植物が伸びる。左側の植物には、マセンと同様に夾函が置かれている。彼の創設したメンリ寺院は、その後長くボン教の中心的寺院の位置を占め、ニャムメは彼とほぼ同時代に現れたゲルク派の開祖ツォンカパに匹敵する高僧に位置づけられる。その尊容も、僧衣を別にすればツォンカパのそれに酷似している。また、多くのボン教徒たちがニャムメをマセンの化身であると信奉している点も、ツォンカパを文殊の化身と見る仏教徒の信仰と軌を一にしている。

右端の像はユンドゥン・プンツォクという僧形の人物である。僧衣をまとっているが、帽子はかぶらず、頭頂に髻を結っている。右手は施無畏印を示し、左手は足の上で夾函を持つ。この人物についての詳細は不明であるが、「僧院長」(*dgon bdag*) という敬称が付いていることから、あるいはこの僧院の開創者のような人物であるかもしれない。五体の中でこの像のみは蓮台ではなく矩形の台に動物の毛皮のようなものを敷いて坐している。また光背の装飾にも他の4例とは異なる独自のモチーフが現れる。

#### 本堂1階のタンカ

本堂の正面である北面には、5体の彫像の左右に1幅ずつのタンカが置かれている。このうち向かって左のタンカは「十六長老図」(*gNas brtan bcu drug*) と名付けられている(図1の1)。画面の中央に黄色い身色のトンパ・シェンラブ(?)を大きく描き、これを取り囲むように、左右に8人ずつの長老を置く。いずれも僧衣を身につけ、剃髪した僧形で描かれている。これ

らの 16 人の長老たちは、仏教の十六羅漢に相当するのであろう。中央に釈迦を描き、その周囲に十六羅漢を配した「十六羅漢図」はチベットにおいて人気の高い題材のひとつであった。図 1 には示されていないが、「16 人の長老」の姿は、それぞれ 1 幅ずつの小さなタンカにも描かれて、本堂の内陣の柱にも掛けられている。

正面向かって左端には「医神である 8 人のデシェー」(sMan lha bde gshegs brgyad) のタンカがある(図 1 の 2)。8 人のデシェーについては詳細は明らかではないが、画面には身色を異にする 8 尊の仏形の尊格が描かれていることから、これらがそれに相当するのであろう。いずれも左手には薬草のようなものを入れた鉢を持っている。「医神」(sMan lha) のアトリビュートであろう。中央に大きく黄色い身色の尊を置き、残りの 7 尊はその周囲に小さく描かれる。身色は向かって右上から右回りに、白、青、黄色、水色、緑、赤、金である。

本堂の左右の壁である東面と西面には、それぞれ 6 幅ずつのタンカが飾られている。図 1 の番号にしたがって、主要な尊格の尊容を中心にそれぞれ簡単に記述しよう。

ギチョ、ツェパメ、チャムデン 3 尊図 (dGi spyod Tshe dpag med Byams ldan bcas gsum) [図 1 の 3]

中央がギチョ、右脇侍がツェパメ、左脇侍がチャムデンである。ギチョは仏形で、黄色い身色、結跏趺坐で坐り、右手は触地印、左手は鉢を持つ。ツェパメは無量寿 (Amit 軽 us) のチベット名と同一の名称であるが、ここでは菩薩形で表される。右手は胸の前で施無畏印のような印を示し、赤い花の茎を持つ。左手には瓶を載せている。甘露瓶であろう。チャムデンも菩薩形で、身色は白、輪宝のような持物を、定印をとった両手の上に載せる。左右の脇侍尊の背景には、二層の楼閣のようなモチーフが現れるが、これは堂内の他のタンカには見られないモチーフである。一種の浄土図を意図した表現かもしれないが、詳細は不明である。

これらの 3 尊は図 1 の 9、10、13 のタンカに描かれる 9 尊とともに「十二儀軌」の 12 尊を構成している。十二儀軌はボン教の基本経典『シジ』gZi brjid の中で説かれる実践体系で、12 の尊格を対象とした儀礼である (Denwood 1983; Kværne 1995: 36-7)。12 の尊格として、Kværne は以下の諸尊をあげる。

1. Kun dbyings, 2. dGe bsnyen, 3. Byams ldan, 4. Dus 'khor, 5. Kun rig, 6. rGyal ba rgya mtsho,
7. rNam 'joms, 8. sMan la, 9. rNam dag, 10. Byams ma, 11. sMon lam mtha' yas, 12. 'Dul chog

これらの 12 尊と本堂内の 4 幅のタンカの尊像とは、一部の尊格の名称が一致しない。尊容から判断して、おそらく、ギチョは 12 のドゥルチョクに、ツェパメは 11 のモンラム・ターイエーにそれぞれ相当するのであろう。

尊者の御身体の集会樹 (rJe sku'i tshogs zhing) [図 1 の 4]

ニャムメ・シェーラブ・ゲルツェンを中心とした集会樹 (tshogs zhing) である。集会樹はチベットの仏教美術独特の形式の絵画で、七種無上供養と呼ばれる実践にもとづいた図像でもある (森 1998)。仏教の場合、釈迦や各宗派の開祖を中心とした集会樹が描かれる。この作品でも、歴史上の人物で、メンリ僧院の開創者であるニャムメが中心となっている。中央に大き

く描かれたニャムメは、本堂正面の彫像の尊容にほぼ一致するが、右手に持った植物の上に、直立した剣を載せている点が異なる。ニャムメの周囲には大勢の人物や尊格が幾重にも取り囲んでいるが、大きく分けて五つの区画で構成されている。ニャムメにもっとも近い区画には、祖師や成就者のような姿の人物が置かれる。その外側にはボン教の高僧たちが連なる区画がある。画面の左右には、それぞれ円形の区画が作られ、中には仏形、もしくは菩薩形の尊格が同心円上に並んでいる。ニャムメの下区画には、忿怒形の尊格が 50 尊近く水平に配されている。なおニャムメの集会樹の別の形式の作品が、供養堂の中にも置かれている。

#### 八十大成就者 (Grub chen brgyad cu) [図1の5]

「八十大成就者」と名付けられたこのタンカは、その名のとおり、成就者たちの姿を描いたものである。ただし、実際には画面上には 88 人の成就者の姿が確認できる。中央には菩薩形の尊格が大きく描かれ(尊名は不明)、その背景となっている山河の中に成就者たちを配する。各成就者は独特の動きや特徴を示し、これをもとにそれぞれの名称の比定が可能である。また成就者たちには順番が割り当てられ、そこから画面内での配列も確認できる。これらの成就者たちの姿は、後でとりあげるキュンポ寺の天井画としても描かれている。各成就者の名称と画面上の配列については、その箇所であわせて述べる。

#### ラマ・ツェワン・リクジン (Bla ma Tshe dbang rig 'dzin) [図1の6]

この作品に描かれているツェワン・リクジンは、8世紀の伝説上のボン教徒テンパ・ナムカー - Dran pa nam mkha' の直弟子とされる (Lauf 1979:194)。ツェワン・リクジンは濃茶色の身色をし、明妃を抱いて坐っている。坐法は半跏坐か遊戲坐に近い。右手はマニ宝、左手にはカパーラを持つ。明妃は赤い身色で、右手にカルトリ、左手にカパーラを持つ。その他に画面に現れる主要な人物として、主尊の左右に3尊ずつの尊格が描かれる。いずれも両手を大きく広げ、駆け出そうとするような独特のポーズをとる。身色、持物、乗り物などはそれぞれ異なる。また画面の下に横一列に、仏教のダーキニーのような姿の女尊が4尊並び、右手にカルトリ、左手にはカトヴァーンガを持ち、丁字立ちで舞踊のポーズをとる。身色のみ異なり、向かって左から赤、青、白、緑となっている。

#### ウェルセー (dBal gsas) [図1の7]

ウェルセー(正式には dBal gsas mgam pa) はボン教でもっともポピュラーな忿怒尊の1尊である (Kvæne 1995:77-80)。3面 18 臂 4 足をそなえ、展右の姿勢で立つ。身色は青黒く、3面の中央の面も同じ色である。頭上にはさらに6つ(?)の獅子の面も重なる。手にはさまざまな武器を持つが、主要な2臂は明妃を抱きながら、ブルブ (phur bu) を両手の間にはさみ持つ。明妃は緑色で1面2臂である。足の下にはやせけた人物が踏みつけられている。持物や尊容には違いがあるが、全体的には仏教の尊格の中のヴァジュラバイラヴァに近いイメージをそなえている。画面にはさらに 13 尊の忿怒形の尊格が描かれている。ウェルセーの図像は Kvæne によって3点紹介されている (1995:pls. 27, 28, 29)。このうちの1点 (pl. 29) とこのタンカとは登場する尊格に一部共通するものが見られる。ウェルセーのタンカは本堂の東面にもう



1 幅ある。

タクラ・プティマルポ (ITag lha sPu gri dmar po) [図1の8]

この尊はボン教の代表的な護法尊で、タクラ・メバル ITag lha me 'bar ととも呼ばれる。赤黒い身色を持ち、展左で立つ。持物が独特で、右手には輪を先端につけた武器、左手には何本もの剣を組み合わせた武器をそれぞれ持つ。画面には主尊の左右にやや大きく4尊の忿怒尊を置き、さらにその回りにさまざまな姿の忿怒尊を配する。また上方の空中には、雲の上に祖師や高僧を50人あまり並べている。タクラ・プティマルポの作例には Kværne が3点 (1995:pl. 37-39)、Lauf (1977:90) と田中 (1998:pl. 100) がそれぞれ1点ずつあげる。一部の作例は尊容が異なる。

チャムマ、ナムジョン、シェルチン (Byams ma, rNam l joms, Sher phyin) [図1の9]

「十二儀軌」を構成する12尊の一部である。中央のチャムマについては彫像のところすでに述べたが、ここでも同様の尊容をとる。タンカでは身色は黄色く塗られている。右脇侍のナムジョンは、十二儀軌の尊格の中で唯一忿怒形をとり、青黒い身色で、展左で立つ。右手には金剛杵を持ち、左手は期剋印を示す。シェルチンはチャムマと同じ黄色い身色で、右手は瓶、左手は鏡と持物も共通である。

ゲルワ・ギャンツォ、クンイン、メンラ (rGyal ba rgya mtsho, Kun dbyings, sMan lha)

[図1の10]

中央のゲルワ・ギャンツォ (正式にはクンサン・ゲルワ・ギャンツォ Kun bzang rgyal ba rgya mtsho) は明らかに仏教の十一面観音を意識した尊容である。直立した姿勢をとり、体の左右には千本の手を広げる。11面は下から順に、5、3、1、1、1とならぶ。8臂のみを大きく描き、このうち主要な2臂は胸の前で合掌する。左右の2尊はいずれも菩薩形で、右脇侍のクンインは身色は青、右手は施無畏印、左手は定印をとる。左脇侍のメンラは、身色は青、右手は触地印を示し、左手は薬草を持つ。(参考図 Kværne 1995:pl. 16)

クンサン (Kun bzang) [図1の11]

中央のクンサン (正式にはクンサン・ゲルワ・ドゥーパ Kun bzang rgyal ba 'dus pa) は、5面12臂をそなえ、結跏趺坐で坐る。直前にとりあげたゲルワ・ギャンツォと同様、左右対称の正面性の強調された尊容である。5面は下から3面、1面、1面の組み合わせで、それぞれ異なる面色が塗られている。主要な2臂は胸の前に置かれ、右手にはチベット文字で「A」と書かれた月輪を持ち、左手には「MA」字の書かれた日輪を持つ。第2臂は下に垂らし、膝のあたりに置かれる。残りの6臂は体の左右にバランスよく広げられ、それぞれ固有の持物を持つ。主要な2臂を除き、これらの8臂の位置や持物は、ゲルワ・ギャンツォとまったく同じである。左右に脇侍に従え、Kværne (1995:30) によれば、右脇侍はチャムマ、左脇侍は「空の女神」(チベット名不明)である。また画面の下の方には春夏秋冬の四季を司る4人の女尊が立像で描かれる。これらの6尊はクンサンの眷属神として他の作品にも共通してみられる。な

お「クンサン」という名称は仏教の普賢菩薩と共通である。ニンマ派の法身普賢と何らかの関わりがあるのかもしれない。(参考図 Kværne 1995:pls. 14,15)

#### ウェルセー (dBal gsas) [図1の12]

すでにあげた図1の7のウェルセーと同一の尊格である。尊容も一致するが、周囲に描かれた尊格には一部に異同が見られる。

#### クンリク、ナムタク、ドゥンコル (Kun rig, rNam dag, Dus 'khor) [図1の13]

十二儀軌の12尊の残りの3尊である。いずれも菩薩形で、身色は中央のクンリクが白、右脇侍のナムタクが青、左脇侍のドゥンコルが緑である。右手を胸の前に置き、左手は定印を示す特徴も3尊に共通である。持物はクンリクが幢幡(右)、ナムタクが幢幡(右)と鏡(左)、ドゥンコルが両端に卍の印の付いた鈎(右)と輪宝(左)である。クンリクの左手には何も持たない。ナムタクの左持物の鏡には「A」と「MA」の2文字が、またドゥンコルの輪には中心には卍がそれぞれ記されている。

#### シゲル・ウギヤ・チャクトン (Srid rgyal dbu brgya phyag stong) [図1の14]

尊名は「百の頭と千の腕を持つ存在の王」を意味する。その名のとおりの尊容を持ち、さらに10足や火炎の光背を供えたグロテスクな姿の護法尊である。主要な2臂のうち、右手は剣を上には振り上げ、左手は血のあふれたカパーラを胸の前に持つ。周囲には眷属と思われる多数の忿怒形の尊格を従えているが、主尊も含め、詳細は不明である。

#### タクツェン (Brag btsan) [図1の15]

護法尊のひとりで、赤い馬にまたがり、中国風の甲冑を身にまとう。右手は蛇の絡まる槍を高く掲げ、左手には鳥(?)をかかえる。同じ尊格の彫像がタクラ・プティマルボの前にも置かれ(図1のf)、さらに本堂2階の16幅のタンカの中にも含まれている(図2の11)。

#### タジク国土 (rTag gzigs zhing) [図1の16]

「タジク国土」と名付けられたこのタンカは、本堂内において唯一、尊格や人物を描いていないタンカである。タジクとはボン教徒の伝説のユートピアであるオルモルンリンのことである。チベット仏教徒にとってのシャンバラ国に相当する。中央に山を置き、これを幾重にも山脈や都城が取り囲んでいる。タジクを描いた類例を、Snellgrove が紹介しているが(1967:pl. XXII)、この作品とは一致しない部分もある。なおオルモルンリンの構造については、サムテン・カルメイが簡単な紹介を行っている(1987:365-7)。

#### 本堂2階のタンカ

本堂の南東の隅に扉があり、ここから本堂の二層部分にのぼるための階段が続いている。二層の部分はツェンカンと呼ばれ、すでに述べたように、幅2メートル程度の回廊が、1階からの吹き抜けの部分を取り囲んでいる。内側の面におもに護法尊を描いたタンカが掛けられてい

る(図2)。さらに図中には示さなかったが、南東と北西の隅にはイノシシとオオカミの剥製がつり下げられていた。護法尊も含め、内部への外的の侵入を防ぐ魔除けの役割を果たすのであろう。さらに、北側の中央、すなわち、本堂の正面に当たる部分(図2の7と8の間)には、本堂の本尊と同じナンパル・ゲルワを中心としたタンカが掛けられていた。

これを除く16幅のタンカに描かれている護法尊について、尊名、身色、面数、臂数、乗り物、主な特徴などを以下に示す。

尊名	身色	面数	臂数	乗り物	主な特徴
Byang sman	白	1	2	ヤク	中国風の着物を着た女性。瓶と鏡を持つ。
sTag ri rong	黒	1	2	9頭の狼?	剣と袋を持つ。
Yum sras	青	1	2	カラス	鎖と壺を持つ。
Mi drid	赤	3	6	獅子?	ブルブ、カパーラ、剣、斧、髑髏棒など。
Dre'u dmar mo	青黒	3	6	赤い馬	ブルブ、カパーラ、剣、斧、髑髏棒など。
Dre'u nag mo	黒	3	6	黒い馬	ブルブ、カパーラ、剣、斧、幢幡など。
gCen lha	黒	1	8	9頭の犬?	剣、矢、カパーラ、旗、小刀、蓮華?など。
gShin rje	黒	1	2	水牛と魚?	水牛面で明妃を伴う。剣と四角いものを持つ。
rMa rgyal	白	1	2	獅子	中国風の甲冑。幢幡と宝の器を持つ。
dMu bdud	黒	1	2	犬(狼?)	斧と鎖を持つ。
Brag btsan	赤	1	2	赤い馬	本堂の同一尊と同じ尊容
dMag dpon	赤	1	2	赤い馬	中国風の甲冑。槍と鎖を持つ。
gNam lha	青	3	6	白い馬	弓矢、鎖、卍の付いた鈎などを持つ。
Dam can	青	1	2	赤いヤク	斧と袋を持つ。中国風の衣と帽子。
Shes khrab can	白	1	2	白い馬	中国風の甲冑。槍と宝の器を持つ。
Nyi bang sad	白	1	2	白い馬	中国風の衣。槍と宝の器を持つ。

## 5. ポンギャ寺供養堂の尊像

供養堂はポンギャ寺の建造物の中では2番目に高い位置にある。東西に長い建物で、奥の半分は祭壇である。手前の部分には赤いカーペットが敷かれ、名称のとおり、供養や礼拝を行うための場となっている。

祭壇上の主要な彫像とタンカを示したものが図3である。図中のa~iは彫像、1~16はタンカを示す。これに連続する東面と西面を図4に示した。このうち図4-1と図4-2は祭壇の両翼に相当する。また図4-3は東面の南半分で、図4-2に続いている。これに向かい合う西面には、タンカ等は飾られていない。

祭壇の中心をなすのは、図3でaで示した金属製のチオルテンである。中央に大きな1基をおき、これの左右に3基ずつ、合計7基のチオルテンが並び、「7つの御身体」(sku gdung)と呼ばれていた。中央のチオルテンにはニヤムメの絵が中心部に飾られている。

このチョルテンの上方で、正面の壁の中央には、クンサン・ゲルワ・ドゥーパのタンカが置かれている。図に示したように、堂内のタンカの中で最も大きく、中央のチョルテンと並んで、供養堂の中心軸を形成している。すでに本堂内のタンカで紹介した作品に比べると、描かれている尊格や人物は少ないが、主尊と6女尊を含め、主要な部分は、前の作品とほとんど同一である。

クンサンの左右には8福のタンカが掛けられている。これらはさらに東面と西面の同じ高さのタンカ6福(図4の1~6)と組み合わせられて、ひとつのセットを形成する。主題はトンパ・シェンラブの生涯で、中央にトンパ・シェンラブを大きく描き、そのまわりにその生涯の主要な出来事をちりばめている。全体は「トンパ・シェンラブの12の御業」(sTon pa gshen rab gi mdzad pa bcu gnyis)と名づけられているが、タンカは14点からなる。トンパ・シェンラブの生涯を描いたタンカ・セットは、フランスのギメ博物館に不完全ながら1セットあり、Kværne による詳細な研究(1986)がある。また、各シーンを単独で描いた文献もインドから出版された(Mkhas grub rgya mtsho 1977)。これらはいずれも供養堂の作品と一致しないが、タンカの典拠とされる『シジ』との照合を含め、比較研究が必要である。

図3の10から14はほぼ同じ大きさのタンカである。全体で一具のものではなく、それぞれ単独の作品と考えられる。10はニャムメ、11はトンパ・シェンラブである。12については「トンパ」というだけで、詳細は不明である。トンパ・シェンラブと同じ尊容であるが、身色は赤で、定印に鉢を載せている点が異なる。13はクンサン・ゲルワ・ドゥーパ、14はシャルザワ・タシ・ゲルツェン(1858-1935)という高僧をそれぞれ中心としたタンカである。後者は19世紀にカム地方で起こった無宗派運動(ris med)の中心人物として有名である(Kværne 1971:278; カルメイ 1988:386)。

15と16は左右で対になるように置かれている。向かって左は本堂の主尊でもあったナンパル・ゲルワ、右はシェンラブ・マセンである。これらのタンカの前には小さな壇が置かれ、ニャムメとシェンラブ・マセンの小像がいくつか並べられている。

東西の壁面に目を移そう。西面の4点と東面の左端の2点は、中央と同じトンパ・シェンラブの生涯を描いたタンカ・セットの一部である。東面の残りのタンカのうち、7については不明、8はニャムメを中心とした集会樹である。本堂の同じ主題のタンカに比べ、描かれている尊格や人物の数はかなり少なく、形式も異なる。

東面の南寄りの壁には、12枚の絵が飾られている。これらは「十二儀軌」の尊格をそれぞれ中心に置いたタンカである。配列は図4-3のようになっている。残念ながらこれらの絵は印刷物で、また一部は様式が異なることから、オリジナルも全体が一具のものとして制作されたのではない。興味深いことに、これらの作品に対しては、すでにあげた Kværne の示す12尊と同じ名称を、質問に答えた僧侶は列挙した。

## 6. キュンボ寺の尊像

キュンボ寺は同仁県の東に位置する農村、群吾村にあるボン教寺院で、正式名称はキュンカル・リクジン・ミンドルリン(Khyung dkar rig 'dzin smin grol gling)である。本堂のみの小さ

な寺院であるが、内部はよく整備され、荘厳された美しい寺院である。今回の調査で訪れたボン教寺院が、いずれも文化大革命終結後、近年になって復興された寺院であるため、古い図像作品が乏しい中で、この寺院の壁画は文革期も破壊をまぬかれ、それ以前の作品がよく保存されている点で注目される。ポンギャ寺の比較例として、この寺院の内部の尊像について、以下に簡単に報告しよう。

キュンボ寺の本堂も南に面して入口を持ち、本尊をまつた正面が北となる。この面に5体の尊像がガラスの扉の中に安置されている。中央はナンパル・ゲルワ、その左右がニャムメとチャムパである。これらはいずれもボンギャ寺の本堂にも置かれていた。さらにその両側には忿怒形の塑像が置かれている。向かって左の尊は尊名は不明であるが、有翼で明妃を伴っている。身色は白で1面2臂をそなえる。向かって右端の尊はウェルセーである。ボンギャ寺ではタンカで描かれていた尊が、ここでは塑像で表現されている。

キュンボ寺の本堂は四方の面からそれぞれ内側に向かってバルコニーが張り出し、回廊のような形になっている。このバルコニーの上の部分、すなわち2階の高さの壁に大きなタンカが各方角に3幅ずつ固定されている(図5の1~9)。ただし入口のある南面にはない。

このうち正面の中央にはニャムメの集会樹がある。ボンギャ寺の本堂の集会樹とほぼ同じ形式をとる。その左右にはトンパ・シェンラブの生涯を描いたタンカが、対になって置かれている。ギメ博物館や先述の14幅の作品などとの比較が可能である。これらの3点はオリジナルのまま残されており、保存状態も良好である。

西面の3幅は、北からラマ・ツェワン・リクジン、ゲルワ・ギャンツォ、ウェルセーをそれぞれ中心としたタンカである。いずれもボンギャ寺の本堂に、同じ内容のタンカが見られたが、周囲を構成する人物群に相違がある。なお4と6の2点はおそらく近年の作品である。5のゲルワ・ギャンツォは一部に剥落や褪色が見られるが、オリジナルの形がほぼ保たれた優品である。

西面は7がクンサン・ゲルワ・ドゥーパで、これもオリジナルのままであると考えられる。剥落などもわずかで、貴重である。8と9の2点については尊名は明らかではない。8は明妃を伴い、展右で立つ白色の尊、9は結跏趺坐で坐り、やはり明妃を伴った菩薩形の尊を中心とする。このうち、9はおそらくオリジナルのままであるが、8は褪色がはげしく、中尊は後世の描き直しである。

キュンボ寺の本堂内は、側壁ばかりではなく、天井にも装飾がほどこされている。ほぼ正方形の天井を、はじめに大きく9つのグリッドに梁で仕切り、さらにそれぞれの内部を4×4の16の区画に分割する(図6)。こうしてできた144の碁盤目のうち、四隅の44区画と中心の4区画を除いた96区画に尊格や人物像を描いている。

人物を描かない区画のうち、中央の4区画にはそれぞれ異なるマンダラが描かれている。銘文などが付されていないため、具体的な名称は不明である。また四隅の11ずつの区画には蓮華を表すモチーフがそれぞれひとつずつ描かれている。

残りの96区画のうち中心のマンダラに接する5つの区画(a~e)には、仏形あるいは菩薩形の尊格が置かれている。それぞれの名称は銘文で示され、図6のようになっている。

残りの91区画にはすべて成就者が一人ずつ描かれている。それぞれの像の下には各成就者

の名称と、1～91 までの通し番号が付されている。このうち図6には通し番号のみを示した。これを見ると 91 の成就者は規則的な配列をとっていることがわかる。中心から右回りにらせんを描くように進み、順次広がりながら天井全体を埋めてゆく。このらせんの先端は a から e の5尊の尊格から続き、さらにその中心には4つのマンダラがある。天井全体がシンメトリカルにとらえられ、その構造を生かしながら人物群が巧みに配されているのである。

銘文に示される 91 の成就者の名称を以下に列挙しよう。これらの成就者の大半については、dPal tshul (1988:292-314) の第 15 章に簡単な紹介が見られる。ただし、両者を比較すると一部の人名は一致しない。リストの右のコラムにはこの異同も示した。

成就者名	dPal tshul (1988)
1 gSang ba 'dus pa	
2 sTag lha me 'bar	
3 rMa lo dgra bcom pa	
4 lHa bon yongs su dag pa	
5 rGyal gshen mi lus bsam legs	
6 Klu grub ye shes snying po	
7 sNang ba mdog can	
8 Mu khri btsang po	
9 Ha ra ci par	
10 sTag za li wer	sTag wer li wer
11 A nu 'phrag thag	
12 Sad ne ga 'u	
13 Zing pa mthu chen	
14 Shad bu ra gug	Shad pu ra gugs
15 sPe bon thog rise	
16 sPe bon thog 'phrul	
17 This dmar spungs pa	This chen hring ni mu ting
18 Sum pa dbu dkar	Sum pa'i rig 'dzin sbu kha
19 Glang chen mu thur	
20 sTod rgyud mthu chen	
21 Sha ri dbu chen	
22 lTse tsha mkhar bu	
23 Gyim tsha rma chung	
24 dMu tsa tra he	
25 Khri thog bār tsha?	Khri thog spar rtsa
26 Ghu hu lu spar ya	Hu li spar ya
27 lHa bdag sngags grol	
28 Legs ting rmang po	

29	gSer tog lce 'byams	
30	Tso mi gyen chen	欠
31	Mar me 'dzon	rKon bu mar me
32	Nam ra rtse dgu	Nam ra rtse sku
33	sPung rgyud mthu chen	欠
34	Pan chen li shu stag ring	Li bon spung rgyud
35	Khe +++++	欠
36	Phu ri ya dor	
37	sTag gzig za ring me 'bar	Ta zig lo pañ Za rang me 'bar
38	lDe ro nyam phel	
39	rNal 'byor bru sha lha gsas dbang po	Bru sha gnam bon
40	Rig 'dzin Tho le grags pa	Tho le rgyang grags
41	Grub chen Nyi ma 'od gsal	
42	Lo bon mu phu	Li bon mu phya
43	Gyim bu lan tsha	Co bon gyim bu
44	Sum pa cho 'bar ba?	Sum pa mu phyang rgya
45	Khu bon mthong grags	
46	Zhang zhung mu tshe 'bar ba	Zhang zhung mu phyog ga rag
47	Ba gor dod de rgyal ba	Ba gor dod de
48	'Jang tsha 'phan snang	
49	rMa bon thugs dkar	
50	sNang bzher 'od po	
51	Li za stag ring	
52	Ya gon ye shes rgyal ba	Jo mi bon mo?
53	Bhe shod mgrin dkar	'Bi sho mgrin dkar
54	Do la gnas pa'i gru 'dzin ma	Phu li gru 'dzin
55	dMu stang g'yu 'dzin	rMu tang g'yul 'dzin
56	Khri zangs rgyal mo	
57	Dod de rgyal lcam	Dod de rgya lcam
58	rNal 'byor gar dpon	Khyung za gar dpon
59	dBa mo sgron gsas	dBa 'mo sgron gsal
60	gTsang gshen snyan ngag pa	gTsang gshen snyan ngag
61	Yar gshen ldem bu	
62	Thang gshen chab dkar	Thang gshen phyag dkar
63	Khyung ye dkar po	Khyung yer dkar pa
64	Ma dha bhi sha	Ma 'da' 'bi sha
65	'Dul byed snying po	
66	'Jar bon ye mkhyen	lJang bon ye mkhyen

67	Ha shang rgyal po	Hwa shang rgya bon
68	不明	欠
69	Khri sde 'od po	欠
70	dNgas pe yi rang	欠
71	Gung rum gtsug phud	欠
72	rDzu 'phrul ye shes	欠
73	Ye shes tshul khirms	欠
74	g'Yung drung tshul khirms	欠
75	gTsug phud rgyal ba	欠
76	Ya gong ye shes rgyal ba	欠
77	Pham shi? dpal gyi dbang phyug	欠
78	Slob dpon Dran pa nam mkha'	
79	Slob dpon Tshe dbang rig 'dzin	
80	SLob dbon Padma mthong grol	欠
81	gShen stong klu yi dbang po	欠
82	Gyer mi nyi 'od	欠
83	rMa stong srel 'dzin	欠
84	g'Yu stod khyung rgod	欠
85	Bru chen nam mkha' g'yung 'brung	欠
86	rGyal sras zhu yas legs po	欠
87	sPa stong dpal mchog rgyal ba	欠
88	Me'u khas pa dpal chen	欠
89	?? ting 'khor lo	欠
90	Khung dkar tshangs pa	欠
91	Ngo bo ye shes ++	欠

+ は銘文が判読できない部分。「欠」は dPal tshul (1988) で言及されていないことを示す。

先述のボンギャ寺本堂にも、成就者を描いたタンカが1幅あった(図1の5)。このタンカでは同じ成就者たちが、図7のような順序で配されてることが、尊容の比較から確認できる。中心の人物を軸に左右対称になるように考慮しながら、原則として上から下に、また向かって左から右に並べられていることがわかる。おそらく仏教の「八十四成就者図像集」のような図像集がすでに存在して、これをコラージュ風にタンカの中にちりばめているのであろう。

## 7. おわりに

青海省同仁県のボン教寺院の中で最も重要と考えられるボンギャ寺を中心に、寺院の概要と、寺院内の尊像についての報告を行った。本報告では寺院内の尊像の名称と位置について、その



図像上の特徴とともに提示するようつとめた。いくつかの神は仏教の尊格にきわめてよく似た尊容を持っていたり、共通の名称を有する。しかし、ボン教内部ではその図像上の特徴はすでに確立しており、その規範に従って制作されていることは、同一の尊格を表現した複数の作品から確認できる。

ボン教のパンテオンの全体像については未だ明らかではないが、パンテオンの中の主要な尊格として、ナムゲル、クンサン、ゲルワ・ギャンツォ、女尊のチャムパ、忿怒尊のウェルセー、タクラ・プティマルボなどがあげられる。さらにこれらと一部重複するが、集合尊として十二儀軌の諸尊も重要である。また、ボン教の実質的な開祖であるニャムメ・シェーラプ・ゲルツェンも、絶大な信仰を集め、その姿が多く彫像や絵画に表されていることも指摘しなければならない。トンパ・シェンラプの生涯を描いた作品も複数見られ、類例との比較や、仏伝図像との関係なども今後の課題としてあげられる。最後に示した成就者の図像も「八十四成就者」の図像集との関連が予想される。

## 謝辞

青海省同仁県の調査にあたっては、国立民族学博物館教授長野泰彦先生、四天王寺国際仏教大学助教授長野禎子先生ご夫妻に全面的にお世話になりました。また中国での調査では北京の蔵学研究中心の方々、とくに宗教研究室副主任ツェリン・タール博士にご助力を賜りました。またボンギャ寺での調査にあたってはパリ大学のサムテン・カルメイ博士に手配をいただきました。現地では青海民族学院留学生の服部雄太氏、蔵学研究中心の職員ダルゲー氏に協力いただきました。記して謝意を表します。最後に、筆者を快く迎え、調査の便をはかって下さったボンギャ寺の皆様に御礼申し上げます。

## 引用文献

Denwood, P.

- 1983 Notes on Some Tibetan bonpo Rituals. In P. Denwood and A. Piatigorsky (eds) *Buddhist Studies Ancient and Modern* (Collected Papers on South Asia 4), pp. 12-19, London: Curzon Press.

dPal tshul

- 1988 *g'Yung drung bon gyi bstan'byung phyogs bsdu*. 西寧：西藏人民出版社出版。

Karmay, Samten G.,

- 1975 *A General Introduction to the History and Doctrines of Bon*. (The M. T. B. Off-prints Series 3), Tokyo: The Toyo Bunko.

Karmay, Samten G.,

- 1977 *A Catalogue of Bonpo Publications*, Tokyo: The Toyo Bunko.

Karmay, Samten G.,

1988 *The Great Perfection, A Philosophical and Meditative Teachind in Tibetan Buddhism*.  
Leiden: E. J. Brill.

カルメイ、サムテン G.

1987 「ボン教」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』pp.364-388, 冬樹社。

Kvaerne, Per.,

1971 A Chronological Table of the Bon po. The bstan rcis of Ñi ma bstan 'jin. *Acta Orientalia* 33:  
205-282.

Kvaerne, Per.,

1982 A Bonpo Version of the Wheel of Existence. *Mélanges Chinois et Bouddhi-ques* 20: 274-  
289.

Kvaerne, Per.,

1985 *Tibet Bon Religion, A Death Ritual of the Tibetan Bonpos*, Iconography of Religions,  
Institute of Religious Iconography State Univ.Groningen, E.J. Brill, Leiden.

Kvaerne, Per.,

1986 Peintures tibétaines de la vie de sTon-pa-gcen-rab. *Arts Asatiques* 51:36-81.

Kvaerne, Per.,

1995 *The Bon Religion of Tibet: The Iconography of a Living Tradition*. London: Serincia.

Kvaerne, Per.,

1997 Invocations to Two Bön Deities. In Lopez, d. S. Jr. (ed) *Religions of Tibet in Practice*. pp.  
395-400, Princeton: Princeton University Press.

Lauf, Detlef I.

1979 *Eine Ikonographie des Tibetischen Buddhismus*. Gratz: Akademische Druck-u.  
Berlagsanstalt.

Mkhas grub rgya mtsho (compiled)

1977 *The Illustrated Life of Mi-bo gSen-rab*. Dolanji: Tibetan Bonpo Monastic Centre.

森 雅秀

1999 「集会樹の造型と儀礼」『印度学仏教学研究』47(2):194-201。

Nebesky-Wojkowitz, René de

1947 Die Tibetische Bön-Religion. *Archiv für Völkerkunde* 2: 26-68.

Nebesky-Wojkowitz, René de

1975(1956) *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective  
Deities*. Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.

再光荣

1994 『中国藏伝仏教寺院』北京：中国藏学出版社出版。

Snellgrove, David L.,

1967 *The Nine Ways of Bon: Excerpts from gZi-brjid edited and translated*. (London Oriental  
Series 18), London: Oxford University Press.

スタン、R. A.

1993 『チベットの文化 決定版』（山口瑞鳳・定方晟訳）岩波書店。

田中公明編

1998 『ハンビツ文化財団蔵 チベット仏教絵画集成 第1巻』臨川書店。

蒲文成

1990 『甘青蔵伝仏教寺院』西寧：青海人民出版社出版。

山口瑞鳳

1988 『チベット（下）』東京大学出版会。

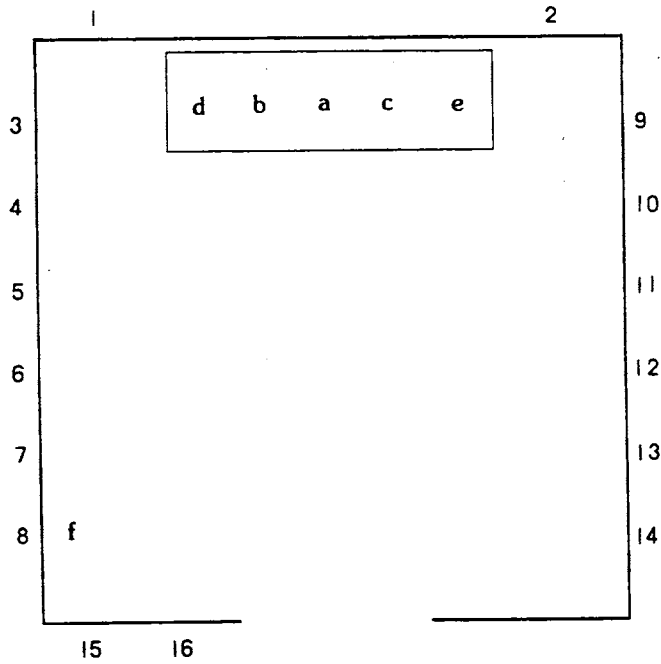


図 1 ポンギヤ寺本堂1階部分の尊像配置図  
(3, 9, 10, 13は中央、向かって左、右の順に尊名をあげる)

- |   |                                    |    |                                   |
|---|------------------------------------|----|-----------------------------------|
| a | rNam mkhyan rgyal ba gshen rab     | 5  | Grub chen brgyad cu               |
| b | Shes rab smra ba'i seng ge         | 6  | Bla ma Tshe dbang rig 'dzin       |
| c | rGyal yum Byams ma chen mo         | 7  | dBal gsas                         |
| d | rJe sku mNyam med                  | 8  | lTag lha sPu gri dmar po          |
| e | Gon bdag g'yung drung phun tshogs  | 9  | Byams ma, rNam 'joms, Sher phyin  |
|   | kyi 'dra sku                       | 10 | rGyal ba rgya mtsho, Kun dbyings, |
| f | lBrag btsan                        |    | sMan lha                          |
|   |                                    | 11 | Kun bzang                         |
| 1 | gNas brtan bcu drug                | 12 | dBal gsas                         |
| 2 | sMan lha bde gshegs brgyad         | 13 | Kun rig, rNam dag, Dus 'khor      |
| 3 | dGi spyod Tshe dpag med Byams ldan | 14 | Srid rgyal dbu brgya phyag stong  |
|   | bcas gsum                          | 15 | Brag btsan                        |
| 4 | rJe sku'i tshogs zhing rgyan thang | 16 | rTag gzigs zhing                  |

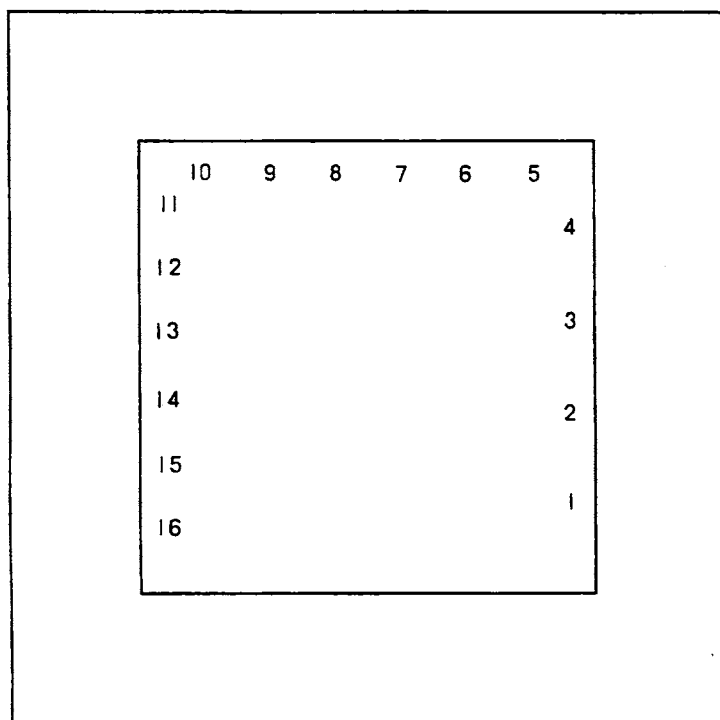


図 2 ボンギャ寺本堂2階部分の尊像配置図

1	Byang sman	9	rMa rgyal
2	sTag ri rong	10	dMu bdud
3	Yum sras	11	Brag btsan
4	Mi drid	12	dMag dpon
5	Dre'u dmar mo	13	gNam lha
6	Dre'u nag mo	14	Dam can
7	gCen lha	15	Shes khrab can
8	gShin rje	16	Nyi bang sad

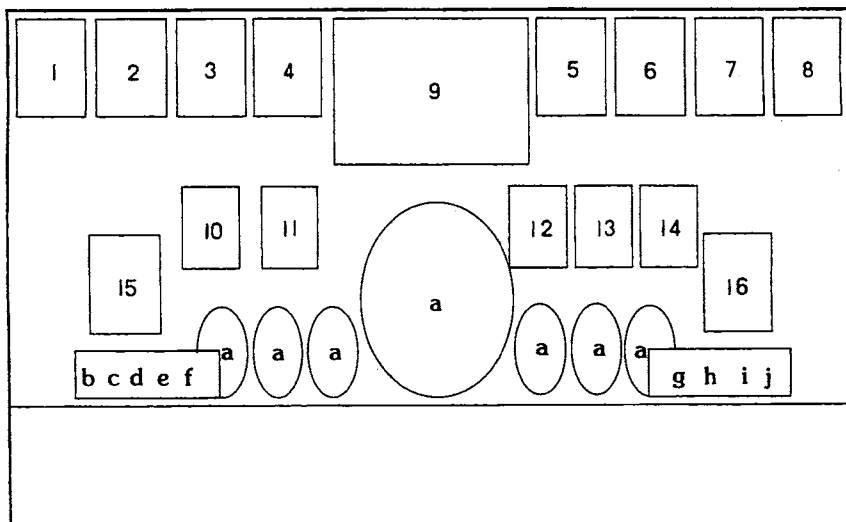


図 3 ポンギャ寺供養堂の尊像配置図（1）北面

- |           |  |    |                                     |
|-----------|--|----|-------------------------------------|
| a         | sku gdung  |    |                                     |
| b f g j   | mNyam med Shes rab rgyal mtshan                        |    |                                     |
| c d e h i | Shes rab smra seng                                     |    |                                     |
| 1~8       | sTon pa gshen rab gi mdzad pa bcu gnyis<br>(nos. 5-12) | 12 | sTon pa                             |
| 9         | Kun bzang gshen lha 'od dkar                           | 13 | Kun bzang shen lha 'od dkar         |
| 10        | mNyam med Shes rab rgyal mtshan                        | 14 | Shar rdza ba bKra shis rgyal mtshan |
| 11        | sTon pa gshen rab                                      | 15 | rNam mkhyen                         |
|           |  | 16 | Shes rab smra seng                  |

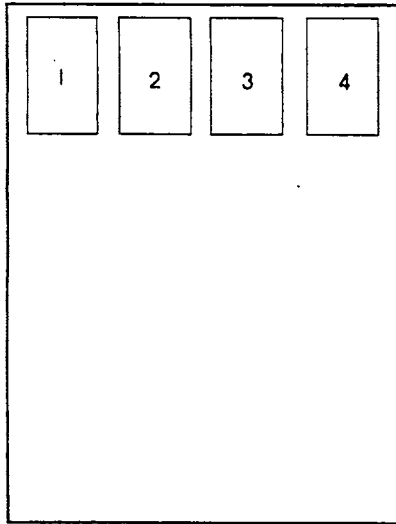


図4-1 西面

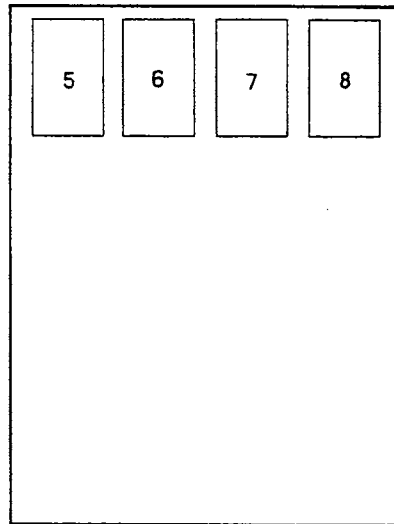


図4-2 東面向かって左側

- 1～6 sTon pa gshen rab gi mdzad pa  
bcu gnyis (nos. 1-4, 13, 14)  
7 不明  
8 rJe sku'i tshogs zhing  
9 Byams ma  
10 Byams ldan  
11 rGyal ba rgya mtsho  
12 Dus 'khor  
13 sMon lam  
14 Kun rig  
15 rNam dag  
16 dGe spyod  
17 sMan lha  
18 Kun dbyings  
19 dGe bsnyen  
20 rNam 'joms

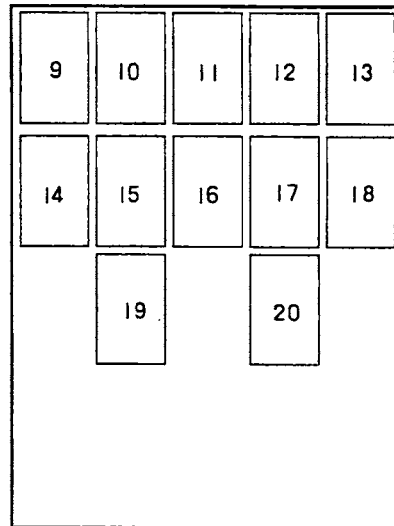


図4-3 東面向かって右側

図 4 ポンギャ寺供养堂の尊像配置図（2）東西面  
（図4-1と4-2は図3の左右に連続する。図4-2と4-3は東面全体を左右に2分割したもの）

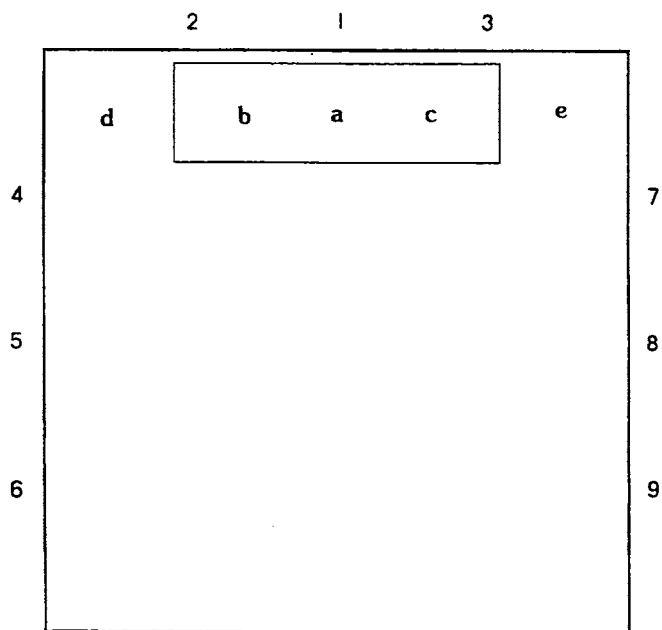


図 5 キュンボ寺本堂の尊像配置図

a	rNam mkhyan rgyal ba gshen rab	1	rJe sku'i tshogs zhing rgyan thang
b	rJe sku mNyam med	2	[トンパ・シェンラブの生涯(1)]
c	rGyal yum Byams ma chen mo	3	[トンパ・シェンラブの生涯(2)]
d	忿怒尊 (尊名不明)	4	Bla ma tshe dbang rig 'dzin
e	dBal gsas	5	rGyal ba rgya mtsho
		6	dBal gsas
		7	Kun bzang
		8	(尊名不明)
		9	(尊名不明)



				70	71	72	73				
			69	46	47	48	49	74			
			45	25	26	27	28	50			
	68	44	24	8	9	10	11	29	51	75	
91	67	43	23	7	a	b	c	12	30	52	76
90	66	42	22	6	m	m	d	13	31	53	77
89	65	41	21	5	m	m	e	14	32	54	78
88	64	40	20	4	3	2	1	15	33	55	79
	87	63	39	19	18	17	16	34	56	80	
			62	38	37	36	35	57			
			86	61	60	59	58	81			
				85	84	83	82				

図 6 キュンボ寺天井画の配置図  
(図の上方が入口、下方が奥に相当)

- m マンダラ  
a Kun tu bzang po  
b Tshad med 'od ldan  
c 'Phrul gshen snang ldan  
d bZang tha ring btsun  
e 'Chi med gtsug phud

1～91 成就者 (各名称は本文中のリスト参照)

